

# 安全運転普及本部発足50年

## 今に受け継がれる安全運転普及活動の原点

2020年10月、安全運転普及本部（以下、安運本部）は発足から50年を迎えた。安全運転教育という考えがまだ一般的ではなかった1970年、安運本部はどのような背景で何をめざし、誕生したのかを振り返る。

### 安全運転教育のルーツ、鈴鹿サーキット

安運本部の発足以前から、創業者・本田宗一郎をはじめHondaの社内では、バイクやクルマというパーソナルモビリティを世の中に提供するメーカーの果たすべき役割を真剣に考えていた。

Hondaの安全運転教育のルーツといえるのが鈴鹿サーキットだ。「バイクに乗っている若者に、安全で安心して走れる場所を提供したい」という宗一郎の想いから1960年、Hondaは三重県鈴鹿市に国際規格のサーキット建設を決断。当時の会社規模からは考えられないような大規模な事業で、1962年9月に完成した。その後、中部管区の白バイ隊長からHondaに寄せられた「白バイ隊員の殉職事故を減らすためにはどうすればよいのだろうか」という相談をきっかけに1964年、鈴鹿サーキットに安全運転講習所（現、鈴鹿サーキット交通安全教育センター）を開設。第1号の受講者として交通警察官の訓練がスタートしたのである。事故の大半は未熟な運転技術が原因であったことから、実際の交通環境を想定した基礎トレーニングを実践。その結果、白バイ隊の殉職者ゼロを達成した。



鈴鹿サーキット安全運転講習所での白バイ隊訓練の様子（1964年）

### 一日でも早く設立することが一人でも多くの命を救う

安運本部が発足する直前の1960年代後半は自動車ブームが盛り上がり、なかでも爆発的に売れたのがHondaのN360シリーズだった。性能の高さと価格の安さで、発売後2カ月の1967年5月、N360はたちまち販売台数で首位に躍り上がり、この年に7万6190台を販売。右肩上がりでも売れ行きが伸びていった。



1960年代後半の自動車ブームを牽引したN360

その一方、1967年頃の交通事故死者数は年間1万3千人台だったが、1970年には1万6千人台と一気に3千人も増加。その間、自動車の保有台数は約2倍に膨れ上がっていた。Hondaは、全国でHonda車に乗っているお客様、ひいてはすべてのクルマ・バイクに乗る人たちの安全に対し、責任を持って取り組む必要があると考えていた。当時、本田技研

工業（株）専務取締役で、後に初代・安運本部長となる西田通弘は、社長の本田宗一郎と副社長の藤澤武夫にこう切り出す。

「耐久消費財であるクルマは、ハードウェアとしての安全性を保証するだけでなく、使用者に対しても、正しく楽しい乗り方といったソフトウェアも加えて、初めて商品になる。すなわち、ソフトウェアも商品である」。

製品販売と安全運転教育の相互関係を強く主張するとともに、既に鈴鹿サーキットで官公庁や企業を対象に実施していたバイクの安全運転教育を一般ユーザーまで普及するための組織が必要だと訴えたのだ。

提案は即決され、わずか20日後の1970年10月1日に安運本部は発足することとなった。参考となる組織がどこにもないなかで、驚異的ともいえるスピードで進められたのは、一日でも早く設立することが、一人でも多くの命を救うことにつながるという信念からだ。

### 使う人とつくる人との間に温かい心が触れ合うことを基本に活動を推進

安全運転普及活動はHondaにとって今までにない活動だった。経験や理論が少ない現状を打破するため、学識経験者との交流を積極的に進めた。そして、1971年3月16日に全国の主要新聞の全面広告で、安全運転普及活動についての宣言を行った。この全面広告に掲載された「ルーニイさんの話」は、本田宗一郎が渡米した際、NASA（アメリカ航空宇宙局）コントロールセンターのチーフとしてアポロ13号の奇跡の生還を指揮したルーニイさんとの対談内容を紹介したものであったが、同時に「使う人とつくる人との間に温かい心が触れ合うことを基本姿勢として、今後の企業活動を実践する」というHondaの企業姿勢を社会に伝えるものであった。

この中で、Hondaは次の3つの活動を表明。

- ①安全運転普及のための活動
- ②100パーセントの点検の実施へ
- ③無公害エンジン開発のための努力

そのうち、「安全運転普及のための活動」は安運本部が数多くの人々に普及活動を行うことを約束するものであった。また、Hondaの安全運転普及活動に対する基本姿勢として、安全運転普及指導員の養成、安全ドライビングクラブの結成促進と支援等、11の活動に関する宣言がなされた。



日本の交通安全に寄与する情報提供と、Hondaの安全運転普及活動の報道を目的として、当紙SJは1971年8月に創刊

### 活動を長期継続するための組織づくり

1970年から73年にかけて、安全運転普及活動の組織づくりが3つの面から行われた。1つ目は、本社、支店、県別代理店、営業所といった二輪・四輪の販売網をあげて、活動に動員できる体制をつくること。2つ目は、本社、支店、県に対応して、Hondaの指導員づくりを進めたこと。3つ目は、地域や職域で日常的な活動にあたる一般の普及指導員づくりである。

安運本部はHonda従業員を対象に、1971年1月に公募を行い、300人を超える応募者の中から、20人を第1期インストラクターとして採用。続いて関連会社にも同様の呼びかけをし、30人が採用された。合わせて50人の採用者は、鈴鹿サーキット安全運転講習所で、7日間の厳しいトレーニングを受け、正式のインストラクターとして独り立ちしていく。

インストラクターの最初の大きな仕事は、県支部インストラクターの養成と、1971年夏から始まった販売店の社員や一般応募者を対象にした、二輪・四輪の安全運転普及指導員の養成だった。

設立からわずか2年後の1972年、安運本部から認定を受けた安全運転普及指導員は8000人を超え、安全運転講習会参加者も6万人に達し、全国的な組織化が進んでいった。

### 危険を安全に体験できる参加体験型の実践教育の場を整備

Hondaは、安全運転教育には「危険を安全に体験してもらう（危険を知ることで安全の大切さがわかる）」「実車を使った運転実技のスキルアップが欠かせない」の2つを一貫して考えてきた。そのためには広いスペースと様々な路面状況を再現できる設備、機材類が揃う専用の施設、そして特別に訓練された指導者が必要である。

安運本部設立当初、安全教育の啓発とトレーニング普及のため、鈴鹿サーキット安全運転講習所の活動を強化することをはじめ、安全運転普及常設館（ホンダショールームを活用）を全国の主要都市につくり、シミュレーターなどを設置して安全啓発を行うこと、さらには専用バスを使って各地で安全運転移動教室を開催する構想を練っていた。後年、安全運転普及常設館（東京）の設置、安全運転移動バス活動など一部実施に移されたが、実際の活動を通して「交通安全センター」構想に発展する。

交通安全センターの構想は、地区（各支店）ごとに一つの交通安全センターをつくるのを最終目標とし、安運本部の地区活動と一体になって、教育実践の場として、活動を進めていくものだった。1973年7月に第1号となる交通安全センター福岡（現、交通安全センターレインボー福岡）が誕生し、Hondaの



お客様向け安全運転講習の様子（1972年）

姿勢が、社会に広く明らかにされた。その後、各地で開設が進んでいく。

### 血のかような言葉と心でお客様を事故から守る

1970年当時、二輪車事故の年間死者数は3000人近かった。しかし、Hondaも関係行政も二輪車の事故分析は行っておらず、例えば、死者の過半数が免許取得2年未満、18歳以下といった実態はよくわかっていなかったのである。ただ、一つひとつのケースから若年者に事故が多発していることは推定できた。

安運本部が二輪事故の増加に対して最初に行ったキャンペーンは「ヘルメットでいこう！」（1971年7～11月実施）だった。1970年代の初めは、ヘルメットの必要性が理解されておらず、データも研究論文も知られていなかった。「ヘルメットでいこう！」キャンペーンに対する販売店側の反響の一つは、ヘルメットを勧めると、バイクが売れなくなるという心配だった。

安運本部は安全啓発のために『セーフティ資料』を制作。第1号で取り上げたのがヘルメットだった。研究データ収集のなかで、ライダーの死因の67.6%が頭部衝撃によるなどのことが判明し、ヘルメットの大切さを理解してもらう必要があった。

当時の安運本部は、なぜその活動が必要かを関係行政やマスコミなどオピニオンリーダー層に理論的、データの的に説明しつつ、顧客、広くは社会に向けてのキャンペーンを行った。店頭指導は、その結果生まれた手法の一つなのである。活字だけでなく、血のかような言葉と心で、お客様を事故から守ろう、に尽きる。「手渡しの安全」という言葉は、この精神から生まれたのである。



店頭指導のための安全運転普及指導員養成

今や交通安全は社会的な課題として関心が高まり、自動車各社は企業の取り組みとして積極的に発信・訴求するようになった。製品（ハード）と教育（ソフト）の両面から交通安全の実現に、Hondaは50年以上前から取り組んできたのである。

### 「安全運転普及本部50年の歩み」

安全運転普及本部が発足から現在にいたるまでの詳しい活動内容は以下のホームページで、2020年11月1日よりご覧いただけます。  
<https://www.honda.co.jp/safetyinfo/50th/>